

|               |                                             |       |        |
|---------------|---------------------------------------------|-------|--------|
| 派遣者番号         | R6K10                                       | 氏 名   | 河野 和顕  |
| 研究主題<br>—副主題— | 体づくり運動における理論的枠組みの再考<br>—脱目的性及び身体知形成の視点を通して— |       |        |
| 派遣先大学         | 東京学芸大学 教職大学院                                | 指導担当者 | 仲宗根 森敦 |
| 所属            | 武蔵野市立第三小学校                                  | 所属長   | 新井 保志  |

キーワード： 運動学 脱目的性 身体知 理論的枠組み 再考

要旨： 本研究は、運動学における脱目的性と身体知形成の視点を用いて、体づくり運動の理論的枠組みを再考することを目的とした。これにより、運動を手段として用いる体づくり運動の授業からの転換を図り、学習者が主体的に運動に取り組む授業実践に寄与することが期待される。

検討の結果、以下の三つの理論的枠組みを提示した。第一に、脱目的性を基底に据え、運動そのものの楽しさや喜びを味わうことを目的とし、学習者の内発的動機付けを高めること。第二に、体づくり運動の手段的価値として身体知の形成を位置付け、新たな運動学習への原動力とすること。第三に、運動学の理論を適用した指導により、学習者の内的な気付きを促し、動きの質を高めること。

本研究で示した理論的枠組みは、体力向上の手段としての体づくり運動から、学習者が主体的に運動に取り組み、他の運動にも適用可能な身体知を形成する授業へと転換する可能性を提供する。

# 体づくり運動における理論的枠組みの再考

## —脱目的性及び身体知形成の視点を通して—

河野 和顕

### 1 研究の目的

本研究の目的は、運動学における脱目的性と身体知形成の視点を用いて、体づくり運動の理論的枠組みを再考することにある。本研究で提示する理論的枠組みは、体力向上を目的としたトレーニング中心の授業や運動を体力向上のための手段として用いる授業からの転換を図るための基礎的資料となる。本研究で提示する理論的枠組みによって、新たな体づくり運動の授業実践に寄与することが期待される。

### 2 研究の方法

第一に、脱目的性の概念について整理するとともに、運動の目的・内容論において運動の手段的価値がどのように扱われてきたかを検討する。その後、脱目的性の概念を用いることの意義を現象学及び動機付けの理論を用いて考察し、脱目的性の概念が体づくり運動に適用される可能性とその意義について検討する。第二に、文献を用いて身体知形成の意義を整理するとともに、先行研究の検討を通して身体知形成のプロセスを明らかにし、体づくり運動に適用される可能性を検証する。第三に、体づくり運動の研究動向を整理し、これまでの研究の成果と課題を明らかにしたうえで、脱目的性と身体知形成の概念を適用し、体づくり運動の新たな理論的枠組みを提示する。

### 3 研究の成果

#### (1) 脱目的性の概念整理と意義の検討

脱目的性に関する検討により、運動のもつ手段的な側面をあえて強調する必要はなく、結果として習得されるべきであることが確認された。また、現象学及び動機付けの理論からも、学習者が自らの身体感覚を通じて「今はできないけれど、できるようになるかもしれない」という予期をもち、その予期が成功体験へと結びつくことで内発的動機付けが高まることが把握された。

#### (2) 身体知形成のプロセスの分析

身体知に関する検討により、身体知の形成が生涯にわたる運動への積極的な関与を支える基盤になるという意義が確認された。また、身体知形成のプロセスにおいては、自己の身体との対話を通じた運動発生のプロセスが重要であることが示された。そのため指導者には、学習者の運動の外形だけではなく、内面を正確に把握し、学習者の身体感覚に応じた段階的かつ個別的な指導が求められることが示唆された。

#### (3) 体づくり運動の研究動向の整理

体づくり運動に関する検討により、従来の体づくり運動には内容の曖昧さや理論的枠組みに関する研究の不足といった課題があることを明らかにした。また、運動学の理論を体づくり運動に適用した先行研究において、体づくり運動で行われる運動は身体知と深く関わっており、運動学の理論を適用した指導によって、学習者の学びを充実させることが可能であることが示唆された。

#### (4) 体づくり運動における理論的枠組みの再考

これまでの検討を踏まえ、新たな体づくり運動の在り方として三つの理論的枠組みを提示する。

第一に、脱目的性を基底に据えることである。脱目的性を基底に据えた体づくり運動の学習において、「今はできないけれど、できるようになるかもしれない」という予期が「できるようになる」という成功体験へと結びつくことで、学習者の内発的動機付けが高まり、運動に主体的に取り組む姿勢が育まれる。

第二に、体づくり運動の手段的価値として身体知の形成を位置付けることである。体づくり運動で形成された身体知は、さまざまな運動に親しむための基盤となり、新たな運動学習への原動力となる。

第三に、運動学の理論を適用した指導を行うことである。運動学習場面では外形的な指摘にとどまらず、学習者の内的な気づきを引き出すことが指導者に求められる。それにより、学習者が自身の動きを修正し、動きの質を高める学習を実現することができるようになる。

体づくり運動の新たな理論的枠組みと既存の枠組みとを比較すると、下の図のように整理することができる(図)。新たな理論的枠組みにおいては、運動そのものの楽しさや喜びを味わうことを目的とし、「したい—できない」という学習者と運動との関係の中で、できない動きをできるようにすることが目指される。その結果として形成された身体知は、「できるかもしれない」という動きの予期をもち、さまざまな運動に取り組むための基盤となる。

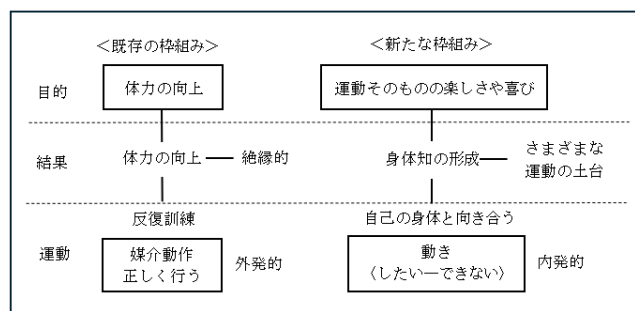


図 再考された体づくり運動の理論的枠組み

#### 4 まとめと課題

本研究の意義として、体づくり運動の授業が従来の体力向上を目的とする授業から脱却し、学習者が主体的に運動に取り組み、他の運動にも適用可能な身体知を形成する授業へと転換する可能性を提供した点が挙げられる。

一方で、本研究では文献及び先行研究を検討し、理論的枠組みを示すことに留まった。今後の課題として、具体的な学習過程や評価規準、一単位時間の授業の構成などを作成し、授業実践を通して理論の実用性と効果を検証することが挙げられる。

以上のように、本研究は体づくり運動に関する新たな理論的枠組みを提供するとともに、運動そのものに動機付けられながら身体知を形成するという視点の重要性を明らかにした。今後は実践的な応用を通じて、その有効性をさらに検証することが求められる。

#### 主要参考文献

- 金子明友 (2002) わざの伝承、明和出版
- 金子明友 (2005) 身体知の形成 (上) (下)、明和出版
- 金子明友 (2007) 身体知の構造、明和出版
- 金子一秀 (2015) スポーツ運動学入門、明和出版
- 村田泰伸・海野勇三 (2006) 運動感覚能力を高める体育指導についての基礎的研究、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、21、pp. 63-78
- 山田美恵子、村山大輔 (2019) 体づくり運動における用具を使った動きづくりに関する運動学的研究、スポーツ運動学研究、32、pp. 17-28